

給食実務学外実習の実態調査 第3報

—実習施設間における比較検討—

松 森 慎 悟 篠 原 能 子

Investigation of Actual Conditions of Food Service Field Practice [III] —Comparative Study Between Practice Facilities—

Shingo MATSUMORI Yoshiko SHINOHARA

これまでの給食実務学外実習における調査により、基本調理、大量調理、衛生管理、礼儀作法について給食実務学内実習にて指導を強化するべきであること、また自己評価と成績評価の相互の結果にずれが生じていることがわかっている。今回は平成18年度の学外実習について施設間での比較を行った。調査方法は給食実務学外実習実態調査（自由解答による質問紙調査）、自己評価、成績評価（調査対象は各実習施設の責任者）である。その結果、実態調査によると注意されたこと、失敗したことの上位に挙げられている内容は、第1報¹⁾、第2報²⁾と同じくどの施設も調理技術と衛生管理が目立った。また、成績評価では保育園、事業所が低いことが分かり、特に保育園ではどの項目でも成績評価が低い割に、自己評価はそれを上回っていることがわかった。今後は衛生管理と調理技術について、さらなる指導の強化を行うとともに、施設間の傾向の違いについてより詳細に調査する必要がある。

キーワード：給食管理，学内実習，学外実習（校外実習）

1. はじめに

著者らは、給食施設で円滑かつ積極的に動くことができる学生を育てるべく、学生指導のあり方について調査・検討してきた。まず第1報¹⁾では平成1年度から15年間の給食実務学外実習実態調査（以下実態調査）について報告した。その結果、基本調理、大量調理、衛生管理、礼儀作法について学生の能力不足が目立ち、学生指導を改善する余地があると考察した。しかし、第1報¹⁾での実態調査では対象者が学生中心であったため、実習施設側の成績評価は詳細には把握できなかった。そこで第2報²⁾では、平成15年度まで実施してきた調査である実態調査に加え、学生自身による自己評価と、実習施設の責任者による学生の評価として成績評価についても調査を実施し検討を行った。その結果、自己評価と成績

評価の結果から、相互間にずれが生じていることが分かった。そこで、今回は平成18年度の給食実務学外実習について、アンケートを改善して調査し、また施設間での比較・検討を行ったので報告する。

2. 調査対象と方法

1) 調査対象及び調査方法

実態調査および自己評価においては、調査対象は平成18年度の駒沢女子短期大学食物栄養科の2年生(83名)で、実習終了後に給食実務学外実習の授業時間内にて実施した。調査方法は実態調査では自由解答による質問紙調査であり、自己評価においては9項目に対して5段階評価で回答させた。次に、成績評価については、調査対象は各実習施設の責任者で、評価対象は平成18年度の駒沢女子短期大学食物

表1 実習施設別学生数及び施設数

単位：人（％）

施設	学校	保育園	高齢者 福祉施設	事業所	病院	合計
学生数	28(33.7)	11(13.3)	10(12.0)	21(25.3)	13(15.7)	83(100)
施設数	27(48.2)	6(10.7)	9(16.1)	6(10.7)	8(14.3)	56(100)

栄養科の2年生（81名・2名は未回収）である。調査方法は6項目に対して5段階評価で回答を求めた。

2) 調査内容

実態調査では、注意されたこと、失敗したこと、ほめられたこと、成功したこと、後輩に対する注意事項という質問に対し記述式で回答させた。自己評価では、礼儀作法、積極性、責任感、衛生観念、協調性、事務整理、遅刻・欠席、健康管理、総合評価の計9項目に対して、5（大変よく出来た）、4（よく出来た）、3（普通）、2（あまり出来なかった）、1（出来なかった）、という5段階評価で回答させた。この内、成績評価と同一項目である6項目において比較・検討した。成績評価では、礼儀・作法、積極性、責任感、衛生観念、協調性、総合評価、という質問に対し、5（大変よく出来た）、4（よく出来た）、3（普通）、2（あまり出来なかった）、1（出来なかった）、の5段階評価で回答を求めた。

3. 結果及び考察

1) 施設別学生数及び施設数

施設別学生数および施設数とそれらの割合を表1に示す。まず施設別学生数については、ここ数年の傾向では事業所が最も多く次いで学校であり、高齢者福祉施設は特に少なかったが¹⁾、今回は初めて学校が事業所を抜いて最も学生数が多く、次いで事業所であり、高齢者福祉施設は例年より数が増加した。最近5年間の傾向として事業所が減少しているが²⁾、これは栄養士業務をしっかり経験したいと望む学生が増加していることが原因だと思われる。つまり、事業所では対象者が成人健常者であるということもあり、体が弱くさまざまな体質や問題を持つ患者や高齢者、園児、学童を対象とする施設に比して、実習内容が単調な調理作業中心になりがちであると思われる。ゆえに、より栄養士らしい専門業務を経験したいと望む学生は、事業所を選択する傾

向が低いと思われた。

2) 実態調査

実態調査の集計表を表2に示す。注意されたこと、失敗したことにおいて上位に挙げられている内容は、第1報¹⁾、第2報²⁾と同じくどの施設も調理技術と衛生管理が目立った。依然としてこの2項目が実習施設で重要視されていることが伺え、学生指導を強化する必要があると言える。また、全体的に第1報¹⁾、第2報²⁾で評価の低かった積極性に関して、ほめられた学生がみられたことは、喜ばしい結果となった。

平成18年度のみ集計結果のため学生数が少ないことから表には掲載していないが、施設別に傾向を見ると、まず学校では、栄養指導や媒体作成、児童とのコミュニケーションなど栄養指導面をほめられたことや失敗したことなどが目立ったことから、学校では児童相手に媒体を作って栄養指導を経験しているケースが多いことが伺えた。また、挨拶や声かけなど礼儀作法面に言及されることが多かった。保育園では、実習ノートの書き方や怪けに注意するこ

表2 給食実務学外実習実態調査

項目	内容	学生数
注意されたこと	食材の切り方	25
	衛生管理	23
	盛り付け方	12
失敗したこと	盛り付け方	15
	調理作業	13
	食材の切り方	9
ほめられたこと	包丁の扱い方	14
	調理技術	11
	盛り付け方	8
成功したこと	栄養指導	10
	作業速度向上	11
	包丁技術向上	8
後輩に対する 注意事項	あいさつ	10
	進んで仕事を する	9
	分からないことがあ ったら聞く	6

となど、栄養士業務の技術よりも実習生としての行儀を重要視している傾向が見受けられた。高齢者福祉施設では、全体的な傾向と同じく、調理技術と衛生管理に言及されることが多かった。事業所では、積極性や作業速度を重要視していることが伺え、また接客時の声出しと言う、事業所ならではの項目についても注意されたこと、ほめられたことに目立って挙げられていた。病院では、比較的衛生管理に重点をおいているのが伺え、また他の施設ではほとんど見られなかった献立作成についてのコメントが目立ったことから、病院では比較的献立作成を経験していることが伺えた。

3) 自己評価調査

項目ごとに施設間で比較した。まず礼儀・作法の

グラフを図1-1に示す。学校で最も評価が高いが、これは実態調査の結果で挨拶についてほめられた学生が多かったことから伺える。高齢者福祉施設で最も評価が低かったが、注意されたことや失敗したことに礼儀・作法面は挙げられていないことから、実態調査と自己評価は必ずしも反映するとは限らないことがわかった。次に積極性のグラフを図1-2に示す。他項目のグラフに比して全体的に評価が低いことがわかる。これは第1報¹⁾、第2報²⁾でも評価が低く、依然として今後の学内実習での指導において重要項目であると思われる。つまり、学生は栄養士業務について初めての社会経験であり自信を持ち合わせていないため、どうしても消極的になりやすいいわば必然的な結果であるが、実習させていたでいる以上、自信がないなりに自ら進んで指

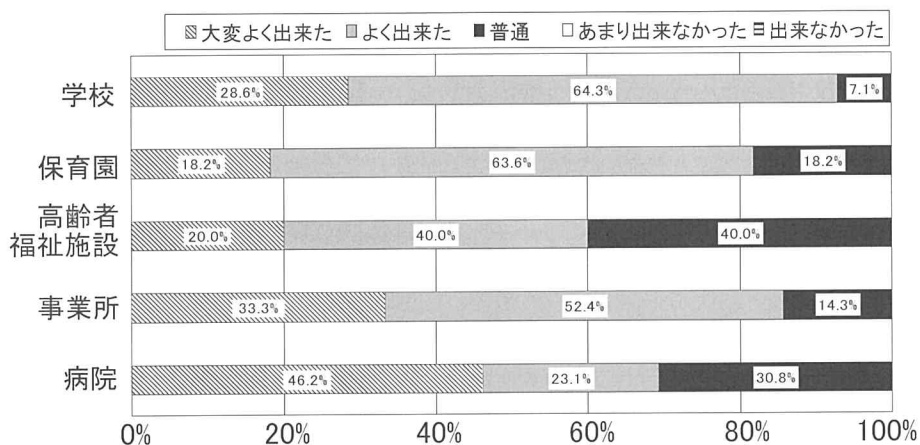


図1-1 自己評価（礼儀・作法）

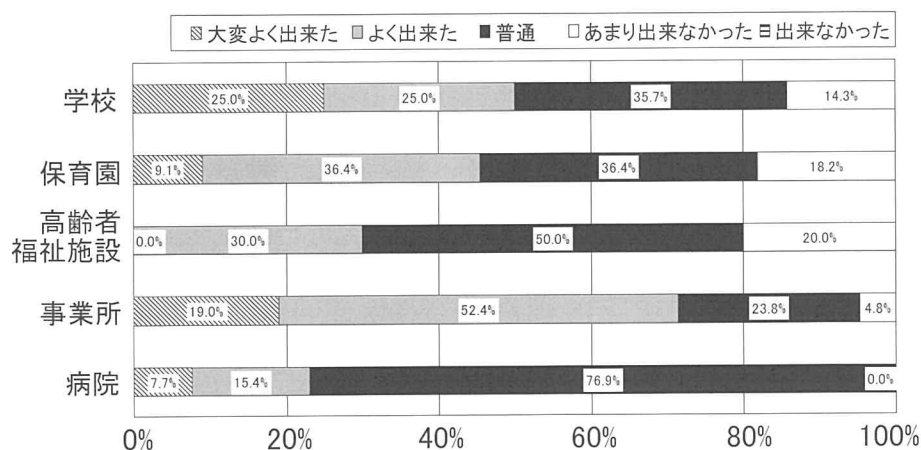


図1-2 自己評価（積極性）

示を仰ぐよう指導する必要があると思われた。しかし事業所だけは突出して評価が高かった。これは積極性をほめられた学生が多く、これが影響していると思われた。次に責任感のグラフを図1-3に示す。事業所では100%の学生が大変よくできた・よく出来たと評価しており、非常に高い結果となった。最も評価が低かったのは高齢者福祉施設であり、50%の学生があまり出来なかったと評価した。これは実態調査の注意されたこと、失敗したことで盛付けミス、配膳ミスなどのミスが目立ったと感じている学生が多く、このことが責任感に対する評価を下げる要因になったのではないかと考えられた。次に衛生観念のグラフを図1-4に示す。他項目のグラフに比して全体的に評価が高いことがわかる。これは、実

習施設にて普段学内実習で学習した衛生管理をきちんと実施できたという自己満足であるのではないかと考えられた。つまり、実態調査の結果によると、衛生管理について注意された学生が見られたが、ほめられた学生は見られなかった。それにも関わらず衛生観念に対する自己評価が高いのは、学生が自己を過大評価している可能性があると思われた。次に協調性のグラフを図1-5に示す。どの施設も平均的であり施設間の差はみられなかった。次に総合評価のグラフを図1-6に示す。他の項目に比してどの施設も高い傾向にあったが、最も評価が高かったのは病院であった。次に高いのは学校であり、最も評価が低かったのは高齢者福祉施設であった。

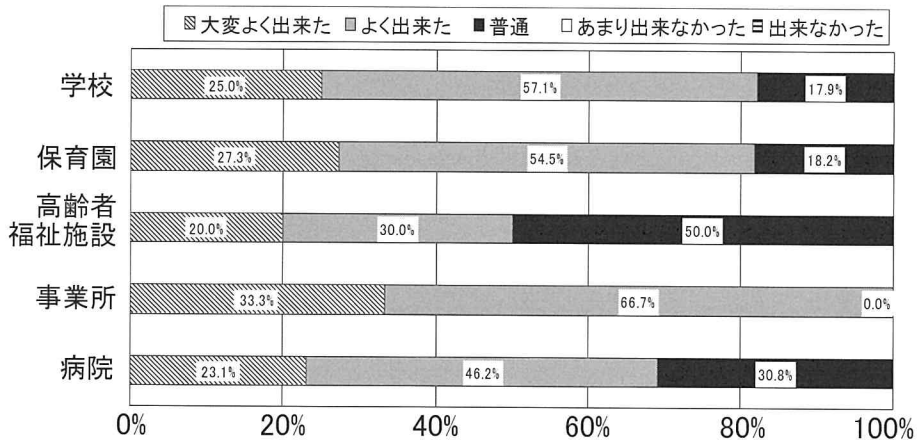


図1-3 自己評価（責任感）

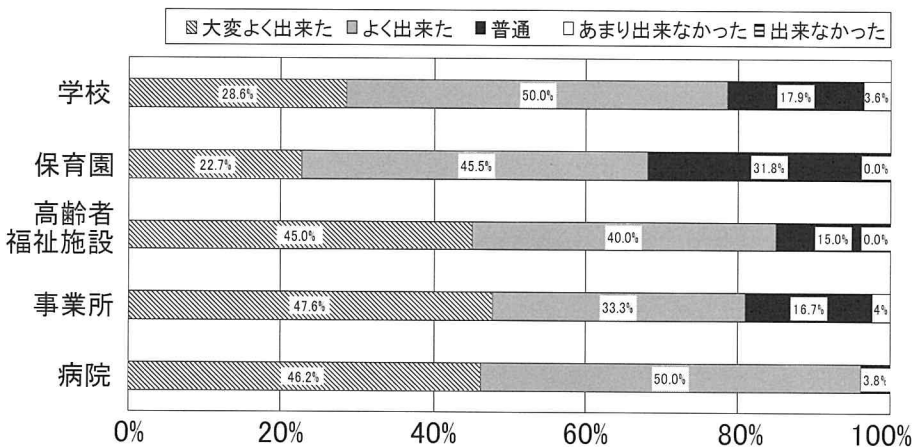


図1-4 自己評価（衛生観念）

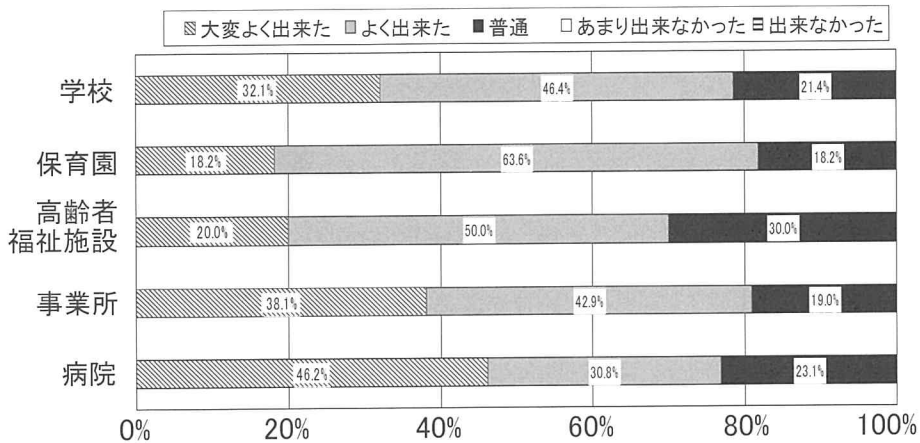


図 1-5 自己評価（協調性）

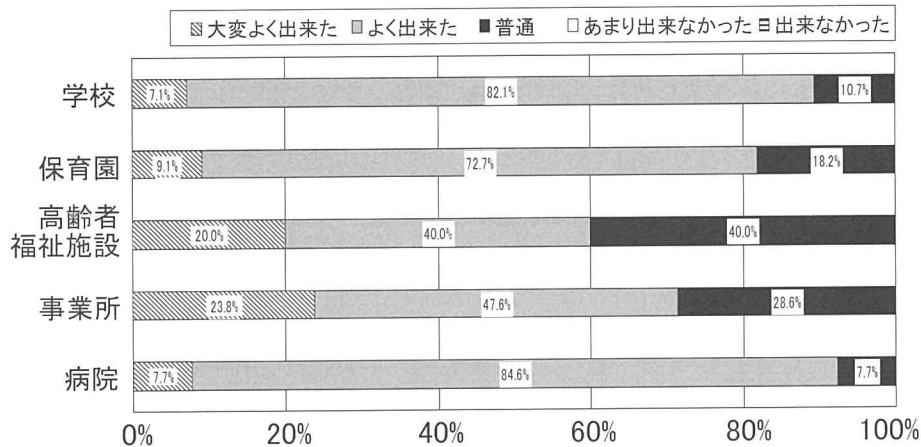


図 1-6 自己評価（総合評価）

4) 成績評価調査

項目ごとに施設間で比較した。まず礼儀・作法のグラフを図 2-1 に示す。保育園と事業所で大変よく出来た・よく出来たが60~70%と評価が低いことがわかる。自己評価では大変よく出来た・よく出来たと答えた学生が80%程度で評価が高いことや、実態調査では特に学生が注意されたり失敗したと感じたりしてはいいないことから、学生の気づかないところで施設側は礼儀作法について不満に思っているということが分かった。これとは異なり学校では、比較的評価が高いが自己評価でも同じくらい評価が高く、実態調査でもあいさつについてほめられた件数が多かったため、整合性のある結果となった。次に、積極性のグラフを図 2-2 に示す。自己評価と同じく、他項目のグラフに比して全体的に評価が低い結

果となった。最も評価の高かった事業所では、自己評価と成績評価の値がほぼ一致した。最も評価の低い保育園では大変よく出来た・よく出来たと評価された学生は30%を下回ったのに対し、自己評価は45%と評価が高かった。学校、高齢者福祉施設、病院では成績評価より自己評価のほうが下回った。次に、責任感のグラフを図 2-3 に示す。学校で評価が最も高く、保育園で最も低く、事業所では評価が分かれた。学校と病院では成績評価と自己評価に大きな差はみられなかった。保育園では大変よく出来た・良く出来たと評価された学生が55%であるのに対し、自己評価では82%と評価が高かった。高齢者福祉施設では大変よく出来た・良く出来たと評価された学生が70%であるのに対し、自己評価では50%と低かった。つまり、学生自身はミスを多くしてしまった

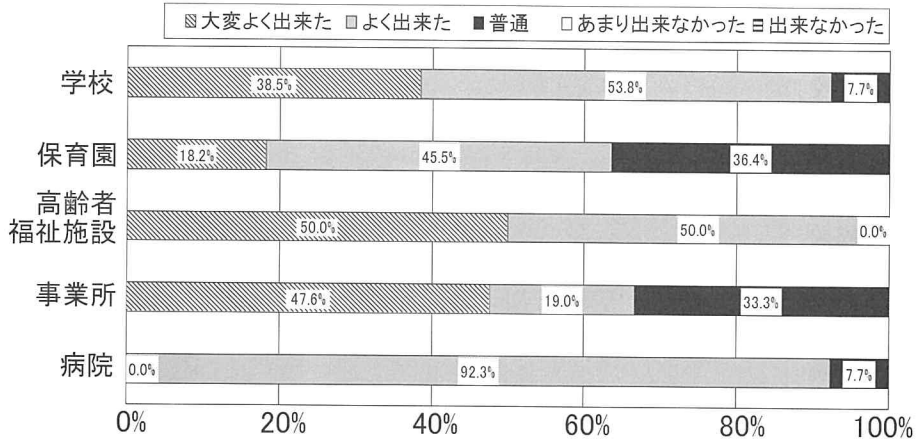


図 2-1 成績評価（礼儀・作法）

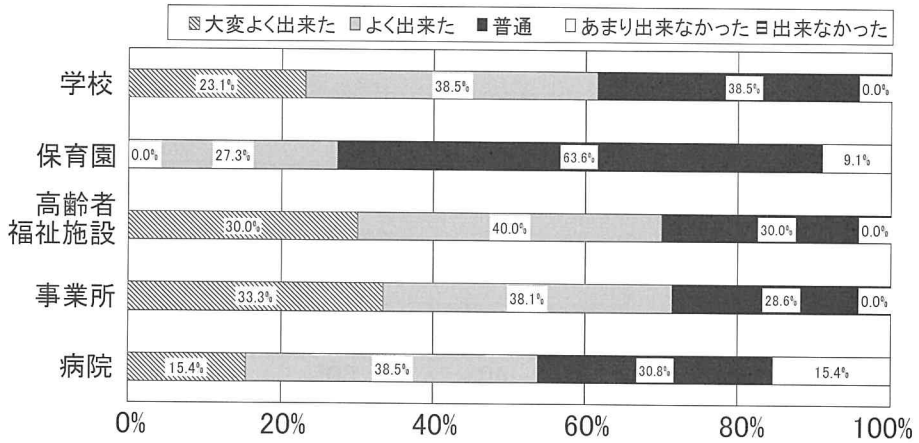


図 2-2 成績評価（積極性）

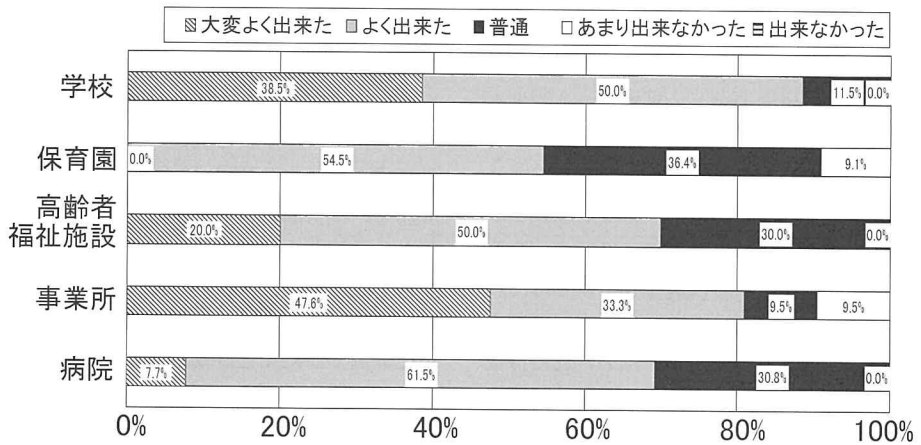


図 2-3 成績評価（責任感）

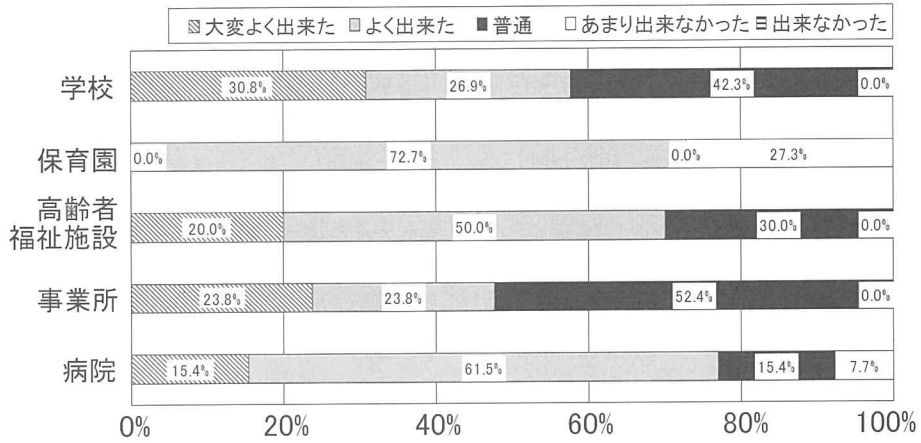


図 2-4 成績評価（衛生観念）

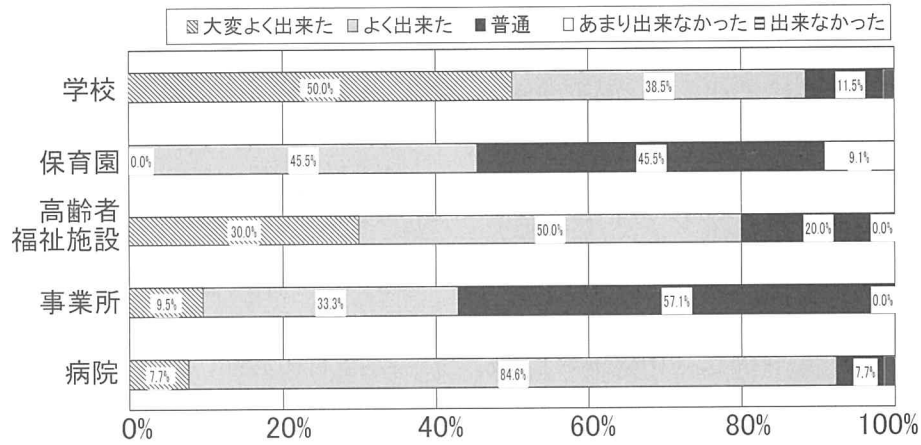


図 2-5 成績評価（協調性）

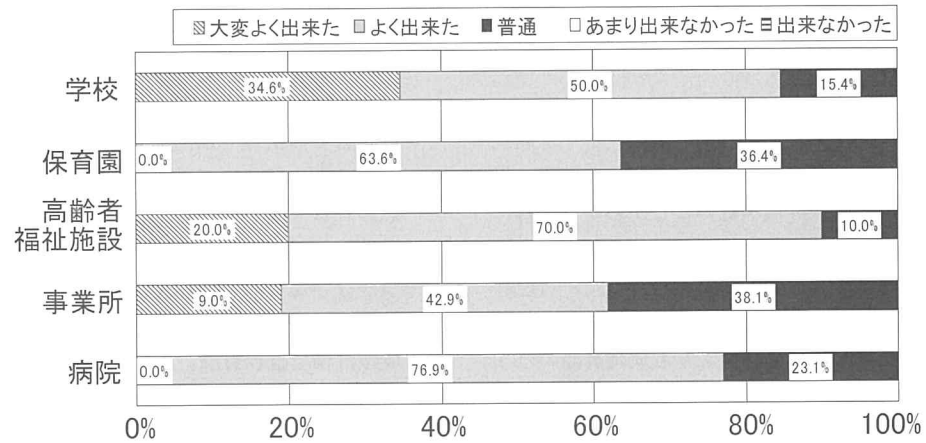


図 2-6 成績評価（総合評価）

ため、責任を果たせなかったと感じて責任感の自己評価は低い、施設側は学生のミスに対して無責任だとは思っていないということが伺えた。次に、衛生観念のグラフを図2-4に示す。最も評価が高かったのは病院であり、自己評価でも病院で最も評価が高かったので整合性のある結果となった。もっとも評価が低かったのは事業所であり、大変よく出来た・よく出来たと評価された学生が48%であるのに対し、自己評価では81%と自己認識よりも大幅に低く評価されていることがわかった。また、成績評価に比して自己評価が高い傾向が見られた。次に協調性のグラフを図2-5に示す。学校、高齢者福祉施設、病院で評価が高く、自己評価よりも高かった。これとは逆に、保育園、事業所で評価が低く、自己評価よりも下回った。次に、総合評価のグラフを図2-6に示す。学校、高齢者福祉施設、病院では評価が高く80%前後の学生が大変よく出来た・よく出来たと評価されていた。しかし自己評価では高齢者福祉施設の評価は最も低く、保育園、事業所でも評価が低かった。

各施設で異なった傾向が見られたが、全体的な傾向としては成績評価では保育園、事業所で評価が低い傾向にあった。特に保育園ではどの項目でも他の施設に比して評価が低く、自己評価に比しても成績評価の方が低かった。これは、保育園が栄養士業務の技術よりも、実習生としての行儀を重要視する傾向があることから、成績評価が厳しくなったのではないかと思われた。しかし今回は平成18年度のみを集計結果であるため、今後もアンケート調査を継続的に実施し、施設間の傾向の違いについてより詳細に調査する必要がある。

4. おわりに

今回は、平成18年度の学外実習のアンケート調査結果を元に、施設間の比較を行った。その結果、保育園、事業所で成績評価が低いことがわかり、特に保育園ではどの項目でも成績評価が低い割に、自己評価はそれを上回っていることがわかった。自己評価よりも成績評価のほうが上回るのは問題ないが、このように全体的に自己評価よりも成績評価のほうが下回る場合はその原因を追究し、改善する必要がある。また、保育園の成績評価が他の施設に比してどの項目でも低値であることも検討の余地がある。

今後は第1・2・3報共通で重要視された衛生管理と調理技術について、さらなる指導の強化を行う予定である。また、今回は平成18年度のみを集計結果であったが、今後これまでのアンケート調査を継続的に実施し、さらに保育園のように常に他の施設に比して最も成績評価が低く、自己評価よりも成績評価が低い施設について、その要因を明らかにすべくより詳細に調査する予定である。

5. 要約

平成18年度の給食実務学外実習について、アンケート調査を実施し施設間の比較・検討を行った結果を以下に示す。

1. 施設別学生数および施設数については、ここ数年の傾向では事業所が最も多く次いで学校であり、老人福祉施設は特に少なかったが¹⁾、今回は初めて学校が事業所を抜いて最も学生数が多く、次いで事業所であり、高齢者福祉施設は例年より人数が増加した。
2. 実態調査では、注意されたこと、失敗したことにおいて上位に挙げられている内容は、第1報¹⁾、第2報²⁾と同じく調理技術と衛生管理が目立った。ほめられたこと、成功したことでは今回初めて、積極性が挙げられおり、学外実習で学生自身が必要性を感じた積極性を評価されたことがわかった。
3. 自己評価調査では、実態調査と自己評価の結果は必ずしも整合性の得られるものではないことがわかった。また、実態調査でほめられた積極性が、他の項目に比して全体的に評価が低いのは、依然として積極的に動くことが困難であると感じている学生が多いことが伺え、今後の学内実習での指導で強化すべき項目であるとわかった。衛生観念に関しては、学生の自己満足と思われる傾向が見られた。
4. 成績評価調査では、保育園、事業所で学生の気づかないところで、礼儀作法について施設側は不満に感じていることがわかった。全体的に、成績評価では保育園、事業所で評価が低い傾向にあった。特に保育園ではどの項目でも他の施設に比して評価が低く、自己評価に比しても成績評価の方が低かった。

5. 各施設で異なった傾向が見られたが、今後もアンケート調査を継続的に実施し施設間の傾向の違いについてより詳細に調査する必要がある。

6. 参考文献

- 1) 篠原能子, 松森慎悟: 駒沢女子短期大学紀要, 39, 75-81, (2006)
- 2) 松森慎悟, 山中美穂, 田中かおり, 篠原能子: 駒沢女子短期大学紀要, 39, 83-87, (2006)